

令和 2 年 6 月 28 日現在

機関番号：22301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13910

研究課題名(和文)社会的弱者へのバッシングはなぜ生じるのか：ステレオタイプ内容モデルからの検討

研究課題名(英文) Why do socially vulnerable people take bashing: Focusing on the Stereotype Content Model

研究代表者

田戸岡 好香 (Tado'oka, Yoshika)

高崎経済大学・地域政策学部・准教授

研究者番号：10794018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：昨今、貧困者などの社会的弱者をバッシングする事例が後を絶たない。ステレオタイプ内容モデルによれば、貧困者などの社会的弱者は「冷たく無能」というように、人柄や能力が低いとみなされやすい。こうしたイメージは社会的弱者を怠惰とみなし、彼らの苦境を自己責任と認知しやすくする。本研究では、日本において社会的弱者がどのようなステレオタイプをもたれるのかを明らかにし、「冷たさ」と「無能」の認知が、バッシングなどの危害を生起させるプロセスを検証した。その上で、イメージの改善方略として、ステレオタイプ抑制、表記方法の変更、ボランティア活動、メタステレオタイプの利用、といった4つの方略の効果を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、人柄と能力というステレオタイプの二次元性に注目し精緻なプロセスを検証しながら社会的弱者に対するイメージを明らかにした。能力も人柄も低く捉えられる集団のイメージ改善は難しいが、それと隣接するクラスター(「温かいが無能」な障害者や高齢者)に関する研究も行うことで、差別のプロセスとそれを解決する糸口を探ることができた。また、うつ病患者や困窮者は、ネガティブなイメージが存在することで、バッシングを恐れて援助を要請することを躊躇う場合がある。本研究によって、さまざまな集団に対するイメージの改善方略を提示したことで、援助を要請する際の心理的障壁をなくす一助にもなると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Recently, there have been many instances of bashing the socially vulnerable people. According to the Stereotype Content Model, vulnerable people, such as the poor, are regarded as "cold and incompetent". These images lead to perceive the poor as lazy, and to have themselves to blame for their plight.

This study clarified how the socially vulnerable are stereotyped in Japan and investigated the process which the image lead to harm them such as bashing.

Then, strategies to improve the image were discussed. Specifically, we tested the effects of four strategies: stereotype suppression, notation change, volunteer activities, and the use of meta-stereotypes.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会的弱者 ステレオタイプ ステレオタイプ内容モデル 偏見

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

昨今、貧困者などの社会的弱者をバッシングする事例が後を絶たない。2016年8月18日にNHKにおいて『子どもの貧困』が特集され、母子家庭で貧困のために大学進学をあきらめようとする女子高生が取り上げられた。放送後、女子高生の生活の様子から、貧困はでっ上げであるというバッシングが起き、身元が特定されるなどの騒ぎが起きた。これを機に、生活保護受給者への非難も生じた。日本では、等価可処分所得の中央値の半分を下回っている相対的貧困率は16.1%であり(厚生労働省, 2013), 6人に1人が貧困層とみなされている。社会的格差が広がっている現状を考慮すると、貧困層に対する不当なバッシングは今後ますます増えていくものと思われる。よって、貧困層などの社会的弱者がバッシングされる心理・社会的メカニズムを明らかにし、イメージ改善の方略を検討することは日本社会の喫緊の課題であろう。

2. 研究の目的

こうした問題意識の元、本研究課題では、貧困者などの社会的弱者はなぜ非難されるのかというバッシングの生起プロセスを実証実験および社会調査によって詳細に検討することとした。そのうえで、社会的弱者に対するイメージを改善し、バッシングを抑制するための方略を示すことを目的とした。

ステレオタイプの内容が感情や行動に及ぼす影響の検討

本邦において、貧困者などの社会的弱者に対してどのようなステレオタイプが持たれているのかを明確に示した研究は少ない。そこで、研究1では、ステレオタイプの内容は能力と人柄の二次元から構成されているというステレオタイプ内容モデル(Fiske et al., 2002)に基づいて、さまざまな集団成員に対するイメージを検討した。

また、ステレオタイプ内容モデルを感情・行動面に発展させたBIAS mapというモデルによれば、こうした認知は特定の感情と行動を導く(Fig.1参照)。例えば、社会的弱者と捉えられる高齢者や障害者などの「無能だが温かい」とみなされる集団に対しては、哀れみを感じやすい。その結果、積極的な援助対象になりやすい一方で、無視などの消極的危険を向けられやすい。また、貧困者などの「無能で冷たい」とみなされる集団は、軽蔑感情や危害行動の意図を向けられやすいと想定されている。このようなステレオタイプが感情と行動に及ぼす影響について、研究1は調査研究によって、研究2では実験研究によって検討した。これらの研究によって、バッシングが生じるプロセスを明確化できると考えた。

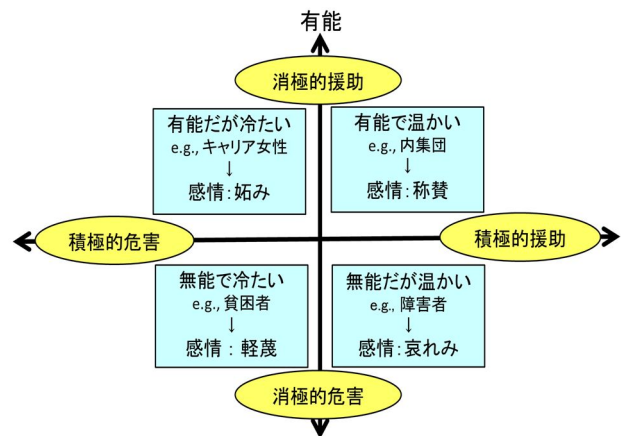


Fig.1 BIAS map の概念図

社会的弱者に対するイメージの改善方略

2つ目の目的は、社会的弱者のネガティブなイメージを改善するための方略を検討することである。本研究では、ステレオタイプ内容モデルに基づき、以下の4つの実験研究を行った。

1点目に、ステレオタイプ抑制という手法を用いた実験室実験を行った。他者に対してステレオタイプ的な判断を避けようとするステレオタイプ抑制は、かえってステレオタイプを意識してしまい、想起しやすくなることがある(リバウンド効果)。よって、抑制をする際には、ステレオタイプの代わりに考える代替思考の内容が重要になってくる。研究3では、ステレオタイプが能力と人柄の2次元から構成されるという知見を踏まえ、能力と人柄のどちらの代替思考を考慮することがステレオタイプ抑制に有効かを検証した。

2点目に、対象集団に対する表記の仕方が態度に及ぼす影響を検討した。近年、障害者への配慮の一環として、「害」の字をひらがなとする「障がい者」という表記が増加している。こうした表記の効果として、栗田・楠見(2010)は、障害者との接触経験がある人において、ひらがな表記は障害者に対するポジティブなイメージを促進することを明らかにした。ただし、こうした表記の効果は社会的望ましさの影響を受けている可能性が否定できない。そこで、研究4では、こうした表記の効果が潜在的態度に影響を及ぼすのかを検討した。また、顕在的態度に関しても、障害者に対する認知・感情・行動といった態度の3側面において、表記形態がどのような変化を生じさせるのかを検討した。

3点目に、ボランティアの経験がステレオタイプ化や偏見を低減させるのかを検討した。外集団と接し、ともにひとつのことに取り組む中で、否定的なイメージが低減することが知られている(接触仮説; Allport, 1954)。そこで、大学の講義内におけるボランティア活動の実践によって、高齢者(研究5a)および障害者(研究5b)に対する態度に変化が生じるのかを検討した。

4点目に、外集団から自集団がどのようにみられているか、という認知であるメタステレオタイプが社会的弱者に対する援助行動に及ぼす影響を検討した。とくに、人柄と能力のどちらのポジティブなメタステレオタイプがより援助行動を促進するのかを研究6において検証した。

3. 研究の方法

研究1: ステレオタイプの内容の検討

(研究1a 田戸岡・植松・谷辺・唐沢, 2017; 研究1b Tado'oka, Ishii, & Hashimoto, 2019)

社会的弱者に対して「能力が低く冷たい」という認知がもたれているか、また、その認知がバッシングを含んだ差別行動に影響しているのかを検討した。

研究1aとして、大学生を対象として、うつ病患者に対するステレオタイプを検討した。うつ病を原因とした自殺が問題視されているにもかかわらず、専門的治療の受診率は伸び悩んでおり、早期治療が進まない理由のひとつとして、うつ病患者に対するネガティブなステレオタイプの問題が指摘されている(檜原, 2016)。そこで、日本においてうつ病患者はどのようなステレオタイプを持たれているのかを、質問紙調査によって検討した。

研究1bとして、リサーチ会社のウェブアンケートによって、幅広い社会的背景を持った成人男女に対して調査を行った。調査では、「生活保護受給者」や「障害者」といった社会的弱者と捉えられる集団に限らず、地位が高いとみなされやすい集団についても調べた。合計16の集団名を提示し、態度を回答させた。

研究2: ステレオタイプ内容が感情・行動に及ぼす影響の実験的検討(田戸岡・石井, 2019)

研究2では、「冷たく」かつ「無能」とみなされることが援助・攻撃行動にどのように影響するかを実証的に検討する。

現代日本において、若年者の雇用対策は喫緊の課題であるが、ニートやフリーターなど、ブランクのある若者は就職活動において困難に直面することがある。その理由の一端として、ネガティブなステレオタイプが影響を及ぼす可能性がある。こうした社会的状況と研究1の結果を踏まえ、研究2では、フリーターに対する態度を題材として用いることにした。

研究1の結果から、低能力低人柄とみなされる集団は、軽蔑感情を向けられやすく、危害意図を持たれやすいことが示されたが、調査研究によるため、因果関係は明確ではない。そこで、研究2では、ネガティブな人柄と能力に関するイメージのどちらか一方でなく、これらの組み合わせがバッシングを生起させるプロセスを検討することとした。具体的には、フリーターであるターゲット人物が失敗した場面に関するシナリオを参加者に読んでもらった。その際、人物の特徴を操作し、能力が低いという情報をのみを提示した条件、冷たいという情報をのみを提示した条件、能力の低さと冷たさを組み合わせた条件を設けた。なお、情報の提示順も態度に影響すると考えられるため、人柄・能力情報の提示順序をカウンターバランスした条件も設けた。以上のようなターゲット人物に関する情報を提示した後、認知・感情・行動意図を測定した。

研究3: ステレオタイプ抑制の効果(今後発表予定)

研究2の結果を受けて、ニートに対するステレオタイプを抑制する際の方略を操作した。具体的には、元ニートの男性が働き始めたというシナリオを提示し、その働きぶりを記述するよう求めた。その際、ネガティブなイメージに基づいて書かないよう抑制教示をした。抑制時に、単純に抑制する場合と「ニートは親しみやすい」と人柄について考える条件「ニートは有能である」と能力について考える条件、そして抑制をしない統制条件を設定した。その後、「無能で冷たい」というステレオタイプのアクセスビリティを測定する課題を行った。以上の手続きで、抑制方略によってステレオタイプ改善の効果が異なるのかを検討した。

研究4: 「障がい者」表記の効果(田戸岡・大井・石井, 2018)

障害者への潜在的態度を測定するため、障害者と好ましさの連合を測定するIATを実施した。その際、カテゴリーラベルが「障害者」となっている漢字表記条件と、「障がい者」となっているひらがな表記条件のいずれかに参加者をランダムに割り当てた。

IAT課題後、顕在的態度を印象評定によって測定した。この際、条件によって教示文の「障害者」の表記を変えた。最後に、偏見抑制動機尺度(高林ら, 2007)への回答を求めた。

研究5: ボランティアの経験の効果(田戸岡・石井・樋口, 2017)

短期大学の講義の一環として、ボランティア活動の実践を行い、その前後で社会的弱者への態度に変化が生じるかを検討した。

研究5aでは、短大生が高齢者を対象としたデイ・サービス施設へ訪問し、歌の披露や製作などの共同作業を行った。その後、高齢者と好ましさの連合を測定するIATを実施した。

研究5bでは、障害者の就労支援施設に訪問し、勤務者と共に箱折りや雑貨作成などの業務を行いながら交流を行った。その前後で、障害者に対する態度を評定尺度によって測定した。以上のように、高齢者および障害者に接する活動をした人とそうでない人を比較し、イメージの変化を検討することとした。

研究6: メタステレオタイプの内容が援助意図に及ぼす影響

(研究6a 小森・田戸岡, 2019; 研究6b 田戸岡・小森, 2019)

東南アジアに関する研究と称して、タイ人から日本人がどのようにみられているかという架空のランキングを見せることでメタステレオタイプを操作した。具体的には、人柄条件(例「タ

イの人々は日本人を優しいと思っている」と能力条件（例「タイの人々は日本人を有能だと思っている」）を設けた。その後、洪水被害を受けたタイに国としての支援をどの程度行うべきかを回答するよう求めた。研究 6a では救助隊派遣などの人的支援および金銭的支援の程度を、研究 6b では人的支援とポンプ車の派遣台数を尋ねた。こうした実験によって、ポジティブなメタステレオタイプが援助行動に及ぼす影響を検討した。

4. 研究成果

研究 1 の結果：ステレオタイプの内容の検討

研究 1a の結果、うつ病患者は「能力が低く冷たい」というイメージが持たれていることが明らかになった。また、うつ病を本人の心の弱さが原因だと考えることは、特に有能さの認知を低下させ、軽蔑感情を生むことが示された。そうした軽蔑感情は、直接的に傷つけるという形ではなく、援助しないという形で差別行動を促進することが明らかになった。

研究 1b の結果、ステレオタイプ内容モデル (Fiske et al., 2002) で指摘されるような能力・人柄×高・低の 4 クラスターにわかれた (Fig.2 参照)。特に本研究で焦点を当てている社会的弱者については、「高齢者」「身体障害者」「知的障害者」は相対的に「温かいが無能」と評定され、「フリーター」「貧困者」「生活保護受給者」「引きこもり」は「冷たく無能」というステレオタイプの内容となった。加えて、BIAS map で示されたように、特に低能力低人柄と評定された集団には、軽蔑感情が抱かれやすく、危害行動の意図を生じさせていた。さらに詳細な分析の結果、とくにこうした集団成員が冷たいとみなされるほど、生活保護などの福祉プログラムに対する反対意見が促進されやすいことが明らかになった。

以上の結果から、「冷たく無能」とみなされやすい集団に対して、その困窮状態が本人の努力不足によるという自己責任論を支持する人ほど、軽蔑感情を感じ、危害意図を生じさせることが明らかになった。昨今よく聞かれる自己責任論は社会的弱者へのバッシングの一因となっていることが明確になった。

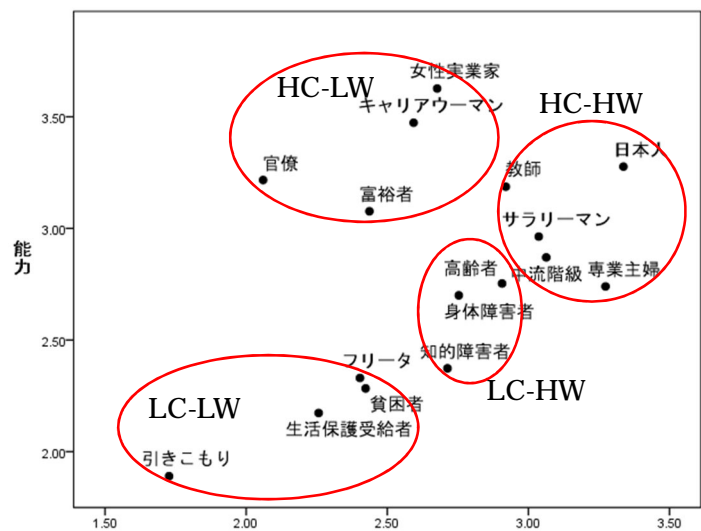


Fig.2 社会的集団に対する能力・人柄評定のプロット

研究 2 の結果：ステレオタイプ内容が感情・行動に及ぼす影響の実験的検討

実験の結果、冷たさに関する情報が含まれることで、軽蔑が高まり、哀れみは減少し、その結果、危害行動が増加、援助が減少する、というプロセスが示された。特に、冷たさ情報が先に提示された場合、この傾向は顕著になることも示唆された。また、冷たさ条件は無能さの情報が含まれないにもかかわらず、バッシングを生起させた。これは、フリーターというラベルを提示しただけで能力が低いと判断され、「無能で冷たい」という認知になった結果だと解釈できる。

研究 3 の結果：ステレオタイプ抑制の効果

実験の結果、人柄や能力といった代替思考を考えるよりも、単純にステレオタイプ抑制を行った条件で、特に人柄に関するステレオタイプのアクセシビリティが低下した。能力に関するアクセシビリティは条件間で差が見られなかった。

先行研究では (e.g., Macrae et al., 1994), 代替思考を用いずに単純に抑制した場合にはリバウンド効果が生起することが示されているが、本研究の結果では最もイメージが改善された。その理由として、抑制時の場面設定が影響していると考えられる。研究 1 の結果から、ニートは「冷たく能力が低い」というステレオタイプが持たれやすいことが明らかになっているが、本研究では元ニートの男性が働く場面を記述する中で抑制を行った。そのため、すでに社会復帰をしており、ニートという集団に属していると考えられなかった可能性がある。その結果、代替思考を考えやすく、抑制しやすかったと考えられる。すなわち、ニートというカテゴリー名が抑制を困難にしているが、社会復帰をする場面を想像することで偏見が容易に変化する可能性も示唆している。ただし、この結果は当初の予想に反する点もあるため、結果の解釈を慎重に行い、さらなる研究を行う必要があるだろう。

研究4の結果：「障がい者」表記の効果

実験の結果、内的抑制動機が低かつ外的抑制動機が高い場合、「障害者」表記よりも「障がい者」表記を提示された参加者の方が潜在的偏見は低下した。

顕在的態度については、特に内的抑制動機が低い場合、「障がい者」表記をすることで、障害者に対する哀れみを増加させ (Fig.3)、積極的援助を増加させる一方で、無視などの消極的危険の意図を増加させた。ひらがな表記は、障害者を配慮すべき対象であるという意識を過度に高めてしまう可能性が示唆された。

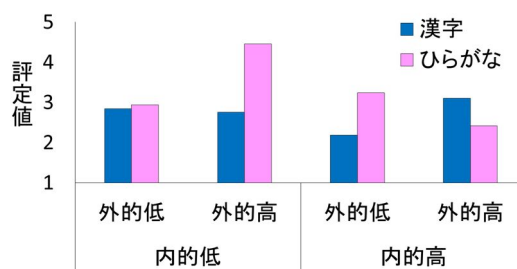


Fig.3 条件および偏見抑制動機ごとの哀れみ評定値

研究5の結果：ボランティアの経験の効果

研究5aの結果、ボランティア経験が多いほど、高齢者と冷たさ/若者と温かさを結び付け、高齢者と能力の低さ/若者と能力の高さを結び付けていることが示された。IATは若者と高齢者の相対的なイメージを測定しているため、結果の解釈には慎重を期す必要がある。一つの可能性として、ボランティア経験が多く、高齢者施設を訪問した人々において、高齢者は弱いという認知が強まり、守るべき対象としての高齢者観が生じやすくなった可能性がある。一方で、IATの結果は、若者に対する能力の高さの認知も反映しており、ボランティア活動をこれまで経験してきた結果、高齢者との接し方も心得ており、より自分が高齢者を援助でき、能力が高いという認知になった可能性がある。こうした自己認知の肯定的な変化はボランティア活動の継続にも繋がりがやういとされる。今後は、ボランティア活動による認知の変化が、高齢者への好悪などの感情(偏見やエイジズム)にどのような影響を及ぼすのかを測定する必要があるだろう。

研究5bの結果、障害者施設に訪問した人たちは、訪問前よりも、訪問後に障害者に対する好ましさが上昇し、軽蔑感情は低下し、無視などの消極的危険が低下した。一方で、障害者と接することで哀れみ感情は低下し、援助意図に変化は生じなかった。障害者施設に訪問した受講生は、働いている障害者と交流を行ったことから、障害者を哀れみの対象として認知しなくなり、結果として慈悲的な偏見が低下したと考えられる。こうした結果は、実際の交流を通して、社会的弱者としての固定的なイメージを変容させた可能性があるだろう。

研究6の結果：メタステレオタイプの内容が援助意図に及ぼす影響

研究6aでは、メタステレオタイプの操作は成功したものの、従属変数である援助する金額や人数の分散が大きく、有意差は見られなかった。

そこで、研究6bでは、日本で保有しているポンプ車の台数や、過去の救助隊派遣の人数の幅をある程度示した上で、回答するよう求めた。実験の結果 (Fig.4 参照)、「日本人はタイ人から有能だと思われている」という能力に関するポジティブなメタステレオタイプを提示された条件で、相対的に外集団の能力を低く知覚し、哀れみを生起させていた。そうした感情は救助隊の人数やポンプ車の派遣の必要性認知を高めており、援助行動を促していた。

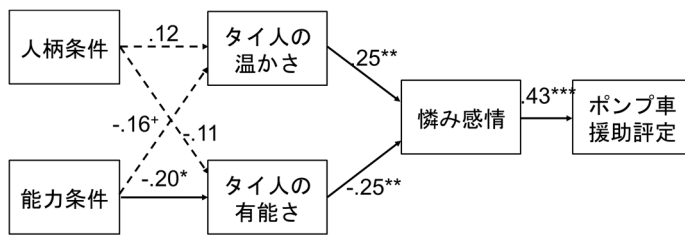


Fig.4 メタステレオタイプ条件が援助判断に及ぼす影響

有意なパスは実線で示した。+p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

以上の結果から、3年間の研究によって得られた成果をまとめると、(1)日本において社会的弱者とみなされやすい人々は、高齢者や障害者は「温かいが無能」とみなされ、貧困者などは「冷たく無能」というステレオタイプがもたれやすいことが示された。また、(2)「無能で冷たい」という能力・人柄のネガティブなイメージが併存する場合に、より軽蔑感情が高まり、バッシングされやすくなることが明らかになった。また、こうしたイメージは生活保護などの福祉プログラムに対する反対意見を促進させた。

以上のように社会的弱者に対するバッシングのプロセスを明らかにしたうえで、(3)イメージの改善方略を検討することができた。具体的には、ステレオタイプ抑制表記の方法を変更する、ボランティア活動において共同作業をする、メタステレオタイプを利用する、といった4つの方略の効果を検証した。いずれの方略の場合も一定の効果はあるが、個人差によってその効果が分かれる部分があり、再検討の余地も残された。今後、これらの方略を現実場面に適用していく場合には、慎重な議論を行っていくことが必要であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田戸岡好香	4. 巻 61
2. 論文標題 ステレオタイプ抑制における効果的な抑制方略の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 204-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.24602/sjpr.61.2_204	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田戸岡 好香・樋口 収・唐沢 かおり	4. 巻 89
2. 論文標題 食品のネガティブイメージにステレオタイプ抑制が及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4992/jjpsy.89.16039	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田戸岡好香・石井国雄・樋口収	4. 巻 72
2. 論文標題 ボランティア学習が学生の社会意識に及ぼす影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 長野県短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 77-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田戸岡好香・石井国雄
2. 発表標題 なぜフリーターはバッシングされるか？ステレオタイプ内容モデルからの検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田戸岡好香・小森めぐみ
2. 発表標題 ポジティブなメタステレオタイプが援助判断に及ぼす影響：ステレオタイプ内容モデルに基づいた検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小森めぐみ・田戸岡好香
2. 発表標題 ポジティブなメタステレオタイプの内容が援助判断に及ぼす影響：水害支援金額と援助隊派遣人数を用いた検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tado'oka, Y., Ishii, K., & Hashimoto, T.
2. 発表標題 Why welfare recipients take bashing? Focusing on Stereotype Content Model
3. 学会等名 Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田戸岡好香・大井美波・石井国雄
2. 発表標題 BIAS mapに基づく「障がい者」表記の影響の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田戸岡好香・植松幹太・谷辺哲史・唐沢かおり
2. 発表標題 ステレオタイプ内容モデルによるうつ病患者イメージの検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石井 国雄 (Ishii Kunio)	清泉女学院大学・人間学部心理コミュニケーション学科・准教授	
研究協力者	小森 めぐみ (Komori Megumi)	淑徳大学・総合福祉学部実践心理学科・准教授	